My Dear MOON

黒蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｙ　Ｄｅａｒ　ＭＯＯＮ

【Ｎコード】
Ｎ７０４６Ａ

【作者名】
黒蝶

【あらすじ】
嫌われ者でひとりぼっちだった真っ黒な野良猫レンが、不思議な橋により月の国の王子様、トーヤと出逢います。月が夜空に昇る度に逢瀬をかさねていくうち、いつしかレンはトーヤに惹かれていき・・・

第1話：～春～　桜吹雪

今夜の月はどこか切ない。
あの人が悲しんでいるのだろうか。。。
たとえそうであったとしても、自分にはもう何もできない。
心の奥がまだ痛む・・・

もうすぐ午前12時。人気の全く無い空き地で私は彼を待つ。昼の日差しは心地よくても、夜になるとまだ少し肌寒さを感じる。だけど私は、そんな春の夜の冷えなど気にならなかった。
とにかく早く彼に会いたかった。
突然、ロウソクに火が灯るような、ボウッとした光が目の前に現れた。
「やぁ、待ったかい？」
光の中から現れた一人の青年が、微笑みながら言った。
「そうね、待ったけど、それほど退屈でもなかったわ。」私は言った。
「今日はどんな話をしようか？」
そう言うと、彼は私のすぐ側の岩に腰掛けた。
「私、この前、桜の花びらが風で舞っているのを見たの。とても神秘的だったわ。」
「サクラ？サクラって・・・・何？」彼は桜を知らないらしい。
「春の季節に咲く花よ。淡いピンク色をしていて、太い木に小さい花がたくさん咲くの。すごく綺麗なのよ。」
「花か。僕も見てみたいなぁ。」
「そういえば、近くに桜の木があったかも。行ってみる？」
そうだね――と彼は言って、ゆっくりと腰を上げた。私は、自分よりも背の高い草むらを上手に避けて、彼と並んで歩いた。

桜の木は、私達が始めにいた空き地から、歩いておよそ十分程経ただろうと思われる、ある民家の庭に立っていた。
塀が邪魔をして、桜の木は上の部分しか見えなかったが、民家から漏れる光に照らされて、桜の花は昼間見たものとはまた一味違った美しさがあった。
「これがサクラかぁ・・・綺麗だ。君はいつもこんなに美しいものを見ているのかい？羨ましいな。」
「でも、ずっと咲いているわけじゃないのよ。桜は、雨が降ったり、風が強く吹くとすぐに散ってしまうの。」
「それは残念だな。でも、それでもこんな綺麗な花が僕の国にもあったらなぁ・・・」彼は寂しそうに言った。
立っている彼を私が見上げることは、とても首に負担がかかる。なぜなら、私と彼では目線があまりにも違いすぎるのだ。なので私は塀の上にあがることにした。
前足と後ろ足で勢いを貯めて、一気に放出する。
ピョン――――
私は軽々しく塀の上に飛び乗ってみせた。
「君はホントに上手に高い所に登るなぁ。痛くないのかい？」
「平気よ。だって猫だもん。」
そう、猫にはこれくらい朝飯前だ。
しばらく桜を鑑賞したあと、私達はまたもとの空き地へと戻り話を続けた。
「僕の国では今日結婚式があってね、結婚式はもう何度も見ているんだけど、いつみてもいいものだね。」彼は言った。
「あなたの国では、結婚式をどんな風にお祝いするの？」私は聞いた。
そうだね――と言って、彼は語り始めた。
「まずは宮殿で、僕の父である国王に挨拶に来るんだけど、あの人話し好きだから、手短にって言ってるのに結局いつも長話になるんだ。」

私はちょっと笑をこぼした。
彼は続けた。「その後は街を、というか国を歩くんだ。早い話がパレードだね。小さい国だから、祝い事とかには国中の人が集まるんだ。別にそうしなければいけないきまりではないんだけどね。」
そう言うと、彼は笑った。そんな彼を見て、私も嬉しくなった。
ふと彼は空を見上げた。そして――
「そろそろ時間だ。ごめんよ、僕はもう帰らなくちゃ。また、月の出る夜に来るよ。」
「次はいつ会える？」私は聞いた。
「月が出るのは予測ができないからね・・・雨が降らなければ月が出るって聞いたけど。」
彼の体が光り始めた。
「じゃあ、雨が降らないことを祈るわ。」
「僕も。君に会えないのも困るし、サクラにもまだ咲いていてもらいたいなぁ。」
彼は言った。「素敵な花を見せてくれてありがとう、レン。おやすみ・・・」
「おやすみなさい、トーヤ」私は言った。
彼は光に包まれながら消えていった。国へ帰ったのだ。
時刻は午前1時――彼の言葉が、まだ耳の奥で響いている。
『レン』
初めて会った時に、彼がつけてくれた名前だ。

第2話：～秋～　出逢い（前書き）

トーヤは一体何者でどこから来たのか。そして黒猫レンの悲しい過去。トーヤとレンの初めての出逢いを収録

第2話：～秋～　出逢い

私は、生まれた時から野良猫だった。
兄弟はいたかもしれないが、よくわからない。気がついたらひとりきりで街を
彷徨っていた。
　人に飼われたことは無く、時々民家の塀やら駐車場などで寝そべっていると、
食べ物をくれる人間がいる。それはありがたいが、その行為がただの同情だという
ことくらい知っている。人間とはそういうものだ。
　街を放浪していると、大抵私のような黒猫は軽蔑される。「汚い」
「不吉」などと
何度言われたことだろうか。好きでこんな風に生まれたわけではないのに・・・
　それでも私は野良猫でいた。
　この生き方以外、ひとりきりでいること以外の生き方など私は知らなかった。

　トーヤと出逢ったのは、ある秋の夜だった。その日も月が出ていた。

　私は、いつものように夜の闇に紛れ、彷徨い歩き、ふと人気はおろか、灯りさえも
全く無い、手入れまでも疎かになったであろう静かな空き地に辿り着いた。
　私は草むらの中に足を踏み入れた。
　丁度、晩の寝床を探していたので、少々みすぼらしいかもしれないが、夜を過ごすには

悪くない場所だった。今夜はここで明かそうとそう思っていた。

突然、目の前が明るく光った。
日の出には明らかに早すぎる。なら何が起こったのだろうか。
私は瞬きもできずに、ただ呆然としていた。

光の中で何かが動いた。

それは、少しずつ姿を露にしていった。
気がついたら、目の前にひとりの青年が立っていた。
その青年は銀色の髪に、肌は透きとおるほどに白く、白いシャツに真っ黒なスーツを纏い、
そして綺麗な青色のネクタイをしていた。
彼が、今光の中から現れたのだろうか？それにしても、人間にそんなことができただろうか。
「やぁ、君は地球の者かい？」青年が口を開いた。
「あ・・・あなたは、誰？」恐る恐る私は聞いた。
「あぁ、驚かせてしまったね、ごめんよ。僕は月から来たんだ。」
月？月ってあの？と私は聞いた。
「そうさ。月には国があって、僕はそこの王子をしている。僕の名前はトーヤ。
はじめまして、黒猫さん。」
そう言うと、彼は手を差し出した。いわゆる”握手”を求めているらしい。私はどうしようか
迷ったが、彼に手をつかまれ半ば無理やりの握手をした。
この時のトーヤの手は、とても温かかったのを今でも覚えている

「あなたが月から来たのなら、あなたは宇宙人？」私は聞いた。
「地球に住む君たちから見ればそうなるのかもね。だけど、月に住む僕達は君たちのことを

宇宙人だと呼んでいるよ。」
確かにそれは最もだ。
宇宙人とかいうのは、今はとりあえず深く考えないことにした。
「どうやって月から地球に？」と私が聞くと、彼は「そうだね、その話をしなくちゃね――」
と言って話し始めた。
「実は、君にとっては信じられない話かもしれないが、月と地球の間には、お互いの星をつなぐ
橋というものが存在するんだ。その橋は月の出る夜にしか現れない。
」
「君は、そんな橋があることを知っていたかい？」彼は聞いた。
いいえ――、と言いながら私は首を横に振った。
「その橋は、どうやら僕ら、月に住む者にしか見えないらしい。
だから地球の人達には夢の
ような話にしか聞こえないかもね。」と、彼は淡々と話した。
確かに、彼の話を聞いても夢のようにしか思えなかった。

第3話：～秋～　君に名を・・・

「ところで黒猫さん、君の名前は？」彼は聞いた。
「私に名前なんてないわ。好きに呼んでちょうだい。」人に飼われたことの
ない私には、名前などあるはずもなかった。
「え、名前がないのかい？それは困ったな。黒猫さんだなんて、なんだか
よそよそしすぎるし・・・」彼は言った。
私は別に”黒猫さん”でも構わなかった。自分に名前がつけられ、それを
呼ばれてどうなるのか、味わったことのない私にはどんなものも
同じに思えた。
それじゃあ・・・と言って彼は口を開いた。
「僕に君の名前をつけさせてくれないか？」彼は言った。
「あなたが、私に名前を？」私は聞いた。
「そうさ。だって、名前があった方が君が君である証なんだから、大事だと
思うんだ。僕だって、呼ぶならきちんと名前で呼びたいし。もちろん、君が
良ければだけど・・・・」
自分に名前がつけられることに、いまいち実感が湧かなかった。
嬉しいのか、
悲しいのか・・・だけど、これといって断る理由もなかったので好
きにさせた。
「別に、構わないわよ。」私は言った。
「そうかい。良かった。それじゃあ何にしようかな・・・」
うーん、と言って彼は考えていた。

「『レン』、はどうかな？」
彼は言った。
「レン？」
「そう。僕の知り合いにね、レンという人がいるんだけど、その人の髪はとても
綺麗な黒色をしているんだ。君にとても良く似ている。その綺麗な黒色が。それで
思いついたのさ。」

不思議な感じがした。
名前を与えられたから・・・違う、それだけじゃない。
『綺麗』という言葉が私の耳の奥で響いた。そんなこと、初めて言われた。

「どうだい？」彼は聞いた。
「えぇ、とても気にいったわ。どうもありがとう。」私は礼を言った。
「それは光栄だ。」そう言うと、彼はにっこりと笑った。
あっ！――と言うと、彼は突然立ち上がった。
「ごめんよ、僕はそろそろ帰らなきゃ。」
「そうなの？」
「あぁ、実は、僕が地球にいられるのは、夜の１２時から１時までの間だけなんだ。
それを過ぎてしまうと、月に帰るのが少し難しくなってしまうから。」
そう言うと、彼の体がボウッと光始めた。
「それじゃあ、また。とても楽しかったよ。」
「また、会えるの？」私は聞いた。
足元から少しずつ、彼の体は光にのまれていった。
「うん。必ずまた会える。」彼は言った。

「本当に？どうしてわかるの？」
「それは・・・もう一度会えたら話すよ。」
もう体の半分はすでに光の中だった。

「おやすみ、レン」
そう言うと、彼は光に包まれて消えていった。
時刻は、午前1時――

彼が去ったあとの空き地は、まるで何も無かったかのようにただ静寂だけが
広がっていた。
――もしかしたら、私は本当に夢を見ていたのかもしれない――
そんな気持ちに
なった。
だけど・・・・
『彼の名はトーヤ、白いシャツに黒のスーツ、綺麗な青色のネクタイ。』
『月の国の王子様で、地球と月の間にかかる橋を渡ってやってきた。』
そして、私のこの黒色を綺麗と言ってくれた。

こんなにも鮮明に覚えている。
夢かもしれない。だけど違うかもしれない。どちらも半信半疑だった。
夢だったら――もう二度と会えないだろう。
夢じゃなかったら――また、会えるかもしれない。
もう一度会えたらいいと、どこかで思ったりした。

第４話：～冬～　初雪（前書き）

トーヤと出逢ったのは夢じゃなかった。
出逢ってまだ間もない頃のふたりは・・・

第４話：～冬～　初雪

「え？それじゃあ君は、ずっと夢だと思っていたのかい？」

トーヤと出逢って何度目かの月の夜のことだった。

季節は冬を迎えていた。

まだ雪は降っていなかったものの、風は冷たく、吐く息は白く染まった。

この時、トーヤは自分の着ている上着を私に掛けてくれた。

「あたり前じゃない。突然目の前が光って、中から人が現れたのよ。しかも宇宙人だなんて。誰だって夢だったと思うわよ。」

「でも、あの夜の次に月が出た夜も、レンはこの場所で僕を待っていてくれたじゃないか。」

あれは――、と言って私は答えた。

「あれは、夢かどうかを確かめるためよ。」

トーヤが月から来たというのは、夢などではなかった。彼はあれから、月が出る度に地球へやってくるようになった。

これはもう、夢どころの話ではない。

「でも、レンはいつもここで僕を待っていてくれているよね。君はいつもここにいるのかい？」トーヤは聞いた。

「いいえ。月の出た夜だけよ。私以外に見られたら、大変だと思って・・・」

私は少し恥ずかしかったので、視線を軽く反らした。

何も知らない者がトーヤを見たら、きっとひどく驚くだろう。そ

して、もしも
大騒ぎなどになってしまったら、トーヤに悲しい想いをさせてしまうと思った。
それに、トーヤのことは私だけの秘密であってほしかった。
「そっか。ありがとう。」トーヤはにっこりと笑ってお礼を言った。

確か、この次の夜もトーヤは来た。
その日は、夜になるまでの間にうっすらと雪が積もり、トーヤが白く染まった
景色に驚いていたのを覚えている。
「レン、この白くて冷たいものは何？」
トーヤは雪を知らなかった。
「あなた、雪を知らないの？」
「ユキ？これはユキと言うのかい？」
「そうよ。空で冷やされた水蒸気が固まったものよ。わかる？」
トーヤは目をパチパチさせて、首を横に振った。”わからない”
という意味だろう。
「わからないのも無理ないわ。雪の説明はけっこう難しいの。だから、これは
”雪”というものなんだっていうふうに考えてくれればいいわ。」
「わかった。」とトーヤは言った。
「あなたの国には雪はないの？」
「ユキはないね。雨ならあるけど、これは初めて見たよ。」
またひとつ、私は彼のことを知った。
「それじゃあ、冬はある？」私は聞いた。
「冬はあるよ。すごく寒い。ここは、僕の国に比べれば全然暖かい方だよ。」
「だからいつも、あなたは私にこうして上着を貸してくれるの？」
「あぁ。僕は別に上着が無くても平気だからね。でも、君は寒い

んだろう。僕の
ことは気にせず使っていいよ。」トーヤは言った。
「えぇ。どうもありがとう。」
ありきたりのようなトーヤの優しさが、私はとても嬉しかった。

「でも、雪も降り始めたし、これから当分月もそれほど頻繁には出ないでしょうね。」
「そうなのかい？それは残念だな。地球に来てレンと話をすることを、僕はいつも楽しみにしているのに・・・」
私も同じ気持ちだった。
トーヤは少し悲しそうな表情をした。
そんなトーヤの悲しみが伝わったのか、私もどこか切なかった。

その後の天気は予想通り、雪やら雨が続き、時には吹雪の日もあった。

月もなかなか出なかった。私は毎晩夜空を見上げた。この時期は、本来なら良い寝床
を確保するために結構忙しかったりする。それでもその時は、空を見上げることだけは
かかさなかった。
トーヤに話したいことはたくさんあった。それはひとつずつ挙げていっても、一晩だけ
ではおそらく語りきれないだろう程になっていたと思う。
私は、トーヤに会いたかった。

それから何日か過ぎ、やっと夜空に月が昇った。
空を見上げて、しっかりと月が高く輝いていることを確認すると、私は思いっきり

走った。
　１２時までは、まだかなりの余裕があった。だけど、この時の私は、とにかく居ても立っても
いられなかった。
　――トーヤに会いたい――
　抱いていた想いはそれだけ。ただそれだけを抱えて、私はあの空き地へ急いだ。

　この時のことは、今でもとてもよく覚えている。
　トーヤはいつも、私に話す時間をくれる。
　話したいことは、数え切れないほどあったはずだった。
　やっと月が出て、トーヤにも久しぶりに会うことができたのに、
それらはひとつも
口に出すことができなかった。

　私にそうしてくれるように、私もトーヤに話す時間を与える。
　そんなふうにしたかったわけではない。トーヤの空気が私にそうさせるのだ。それは
とても心地が良かった。

　トーヤと出逢って初めての冬の終わり頃のことだった・・・

第5話：～春～　桜散り・・・

おそらく、トーヤはもう一度桜を見たかっただろう。

あの後すぐ台風が上陸したようで、あれほど美しく咲き誇っていた桜はほとんど散ってしまい、今となっては葉だけになってしまったのだ。

もう一度トーヤに桜を見せたかった。そして微笑んでほしかった。

私は、そんなトーヤが見たかった。

「そうか、サクラはもう散ってしまったのか・・・」

「ごめんなさい、もう一度くらい、あなたに見せたかったんだけど。」

「君が謝ることはないよ。サクラは次の季節も咲くんだろう？」トーヤは聞いた。

えぇ、もちろん――と私が言うと、トーヤは「そうか」と言って笑った。

「それならまた見れるじゃないか。次の春、また一緒にサクラを見よう、レン。」

「そうね。次の春も、あなたと桜を見ることを楽しみにしているわ」

”一緒に”というトーヤの言葉が、妙に耳に響いた。

「レン、君はいつも、何をして過ごしているんだい？」トーヤは聞いた。

「どういうこと？」

「いや、僕と会っている時以外は、どんなことをしているのかなって思って・・・」

「あぁ、特に何かをしている、というのはないわね。寝ているか歩いているか・・・それくらいかしら。」私は答えた。
私の普段の生活なんてそんなものだ。
「誰かと？」トーヤが聞いた。
「いいえ。ひとりよ。」私は何のためらいもなく答えた。
「寂しくはないのかい？」
「私は、”寂しい”というものがどういうことがわからないの。物心がついたときにはもうひとりだったから。」
そうか――、と言うと、トーヤは私の頭を優しく撫でた。トーヤの手は、私を包み込めそうなくらい大きかった。

「あなたはいつも何をしているの？」今度は私が聞いた。
僕かい？――と言って、トーヤは話し始めた。
「僕はほとんど外で過ごしているかな。街の人たちの農作業や機織りの手伝いさ。」
「王子様なのにそんなことをするの？」
「え？しないのかい？」
「だって、王子様って言ったら偉い人だから、いつもお城にいたりするんじゃない？」私は聞いた。
「そんなの退屈だよ。父と母はそうだけど、僕は王宮にいてもそれほどすることはないんだ。ほとんど両親の仕事になるからね。だから、どちらかと言ったら僕は外に居る方が心地がいいんだ。」
「割と自由なのね。」私は言った。
「そうさ。いずれは、王になるための勉強期間みたいなのを与えられて、そうなってしまうと、そんな風に自由にはできなくなるんだ。だから、それまでの間に僕はいろんなことをしたいんだ。」
「それは素敵ね。」
桜は散ってしまったけれど、ふたりの会話は今日も咲き誇っていた。

「ねぇ、ずっと聞きたかったんだけど、月の出る夜、あなたはいつも
必ずここへ来るわよね。あなたの言うその橋とやらは、同じ場所に
何度も訪れることは可能なの？」
「それは大丈夫だよ。僕も、最初は二度と同じ場所へは降り立てない
と思っていたんだ。」トーヤは続けた。
「だけど、橋は実は何本も存在していて、それぞれ形も違うし
色だって違う。つまり、前にレンが言ったように、地球にはたくさん
国が存在しているんだろう。それぞれの国に橋があるんだと僕は
思うんだ。」
「なるほど、じゃあ、ここへ何度も訪れるためには・・・」
「うん。その橋の形と色を覚えておけば、何度もここへ来られる
ってことさ。」トーヤは言った。
「そういうことだったのね。」
まったく、その”橋”とやらは謎だらけだ・・・
「それじゃあ、最初にその橋を渡った時、どんな気分だった？」
うーん・・と言ってトーヤは話し始めた。
「結構ドキドキしていたよ。橋の存在は知っていたけど、実際に
渡るのは初めてだったから。」
「でも、あなたと初めて逢ったとき、あなたはそんな様子じゃない
ように見えたけど？」
「あぁ、僕はここへ来る前も、いくつかの国へ降りているからね。
」
「そうだったの！？」
これには本当に驚いた。
「だけど、どこへ行ってもただ驚かれるだけだった。僕と口を
きいてくれる人なんてひとりとしていなかったんだ。」トーヤは言
った。

「そんなことがあったの・・・」
「僕は、この国も同じだと思っていたんだ。」
「だけど、ここには君がいた。」トーヤは言った。
「僕を見て、こうして言葉を交わしてくれる。あたり前のようなことが、
ものすごいことのように思えたんだ。」
「そんな、私はそんな大それたことはしていないわ。」私は言った。
「いいや、レン、君は知らないだろうけど、僕が初めてここへ来た時、僕を怖がらずに受け入れてくれたこと、僕にとっては救いだったんだよ。」
そう、トーヤは言った。
救われているのは、私の方だ。
こんな、嫌われ者で薄汚い私の傍にいてくれる。それがどれほど私の心に衝撃を与えているか、きっと彼は知らないのだろう。
なんだろう、何かが胸の奥深くに突き刺さったような気がした・・・

第6話：～初夏～　衝動

春も終わり、快適な睡眠を与えてくれていた昼の気温は、少しずつ上昇していった。

もうじき、梅雨の季節がやってくる。

「私達が会えたのは、あなたが偶然ここへつながる橋を選んでくれたからなのね。」私はトーヤを見ながら言った。

「どうしてそう思うの？」

「だって、生きていく中で起こりうる物事なんて、みんな偶然の出来事じゃない。」

そうかなぁ・・・と言って、トーヤは口を開いた。

「確かに、偶然はたくさんあるかもしれないけど、僕がこの場所への橋を選んで、ここへ来たことまでも僕は偶然とは思えないかな。」

「なぜ？」私は聞いた。

「僕は、君と出逢えたことを偶然とは思えないよ。」

トーヤは続けた。

「レン、君という存在は、この世界に君しかいないんだよ。猫は当然たくさんいるだろうし、その中に黒色をしたものもきっとたくさんいるはず。だけど、僕が『レン』と呼ぶ黒い猫は君以外にはいないじゃないか。」

「でも、『レン』って名前の黒猫は、もしかしたら他にもいるかもしれないわよ。」私は言った。

「うん。だけど、それは僕の知らない黒猫だ。それに、必ず君とどこかしら違うところがあるだろう。人と同じように、この世に全く同じ猫は一匹として存在しないんだよ。」

「わかったわ。」

「だから、そんな、数え切れない中のたった一匹の君に出逢えたことを、
僕は”偶然”なんて簡単な言葉で片付けてしまうのは、あまりにももったいなさすぎるよ。」トーヤは強い口調で言った。
「偶然じゃなかったら、あなたは何だと思うの？」私は聞いた。
それは――とトーヤは言った。
「誰かと誰かが出会うことは、一体何が根源となって起こるのか僕にもよくわからないんだけど、どの出会いも、無駄なものなんてひとつもないと僕は思うんだ。」とトーヤは言った。
「あなたの考えることは素敵なことばかりね。」私は言った。
「だからレン、僕は君と出逢えた事も、とても嬉しく思っているよ。」

その瞬間、涙が溢れそうになったのを、私は必死でこらえた。
トーヤが語る言葉のひとつひとつが、今まで聞いた事の無い言葉のように思えた。そんなことは決してなくて、どれもありふれたものなのは
確かなのに、トーヤが言えば違うものに感じた。
トーヤの存在が、私の中で日に日に大きくなっていっていることに、
私は気づかぬふりをした・・・

第7話：～梅雨～　五月雨（前書き）

自分の中で何かが変わっていく・・・
梅雨の時期になり、レンはトーヤに対する感情に変化があることに気づく。

第7話：～梅雨～　五月雨

雨の日が続いた。
空気は生暖かく、ジメジメしている。
梅雨にはいったらしい。

月もなかなか出なくなった。
おそらくはあの寒い冬以来だろう。こんなにも
トーヤに会えない日が続くのは・・・
きっと、あの時と同じなのだろう。
毎晩夜空を見上げて、それを繰り返していくうちに
いつしか時は経って。
そのうちトーヤに会えるだろう。

雨は毎日流れるように激しく降っていた。雨が降っていなくても、
空は薄暗い雲に覆われていて、気分さえもどんよりしていった。

トーヤに会いたい。
あの冬も同じだった。同じだと思っていた。
何かがあの時と確かに違う。
会いたい気持ちは同じだ。だけど、話したいことがあるとか、
急ぎの話があるとか、そういうことではない。
ただ会いたいのだ。
会いたくて、会いたくて、会いたくてたまらない。
こんな気持ちは初めて感じた。

――そのうち月も出るだろう――
私は自分に言い聞かせた。そうしなければ、自分が自分でなくな

りそう
な気がした。
大丈夫、ひとりには慣れている。
大丈夫・・・大丈夫・・・ダイジョウブ・・・・
なんだろう、心の奥がポッカリと開いたような感じがする。
この気持ちはなんだろう。
何かが落ち着かなくて、やりきれない。
私は一体、どうしたというのだろうか・・・・

『寂しい？』

ふと誰かが自分に問いかけたような気がした。
辺りを見回したけど、そんなものは見当たらなかったし、第一自分に声をかけるような存在だっていなかった。
それなのに、ふと聞こえた声が耳の奥で響いている。

”寂しい”なんて、生まれてから一度も思ったことなんて無かった。
そんな感情があること自体知らなかったし、意味だってわからなかった。

ねぇ、これが”寂しい”ということなの？
尋ねて帰ってくる声など無かった。
だけど、もしもこんな気持ちが”寂しい”という気持ちなら、なんて
切ないのだろう・・・・私はそう思った。

トーヤ、トーヤ、トーヤ――

何度も何度も、心の中で彼の名前を呼んだ。呼んだところで、トーヤが
すぐに来てくれるわけがないということぐらい、私にはきちんとわかっていた。
だけど、そうせずにはいられなくて、私は彼の名を呼び続けた。
きっと、私はどこかで願っていたのだろう。
早くトーヤに会えるようにと。
だけど、彼の名を呼ぶたびに、心の奥に開いた穴が広がっていくような
気持ちになった。

雨はまだ降り続いている。
梅雨は始まったばかりだった――

第8話：～梅雨～　恋雨（前書き）

確かにある、初めて感じる気持ち。
この気持ちは一体・・・
レンの想いが今やっと明らかに

第8話：～梅雨～　恋雨

久しぶりに夜空に月が昇った。
「やぁ、久しぶりだね。」
時刻は午前12時。トーヤはいつもどおりの時間に来た。
やっと、トーヤに会えた――

「えぇ、本当に。」私は言った。
「なかなか橋が現れなくてね、少し心配だったんだ。何かあったのかい？」
「長雨続きだったのよ。梅雨っていう時季で、雨の日が何日も続くの。」
「それで月が出なかったのか。」トーヤは言った。

不思議なことに、私の心臓は、いつもに比べどこか足早だった。
ドクン――、ドクン――、・・・・
大きく波打っているのがとてもよくわかった。こんな静寂だらけの場所では、すぐ目の前にいるトーヤに、この心臓の音が聞こえてしまいそうで、すこし恥ずかしくなった。

レン、とトーヤは言った。
「雨が降っている間、君は何をしていた？」
――ずっと、あなたのことを考えていたわ――・・なんて言えるはずがない。
「雨を凌ぐことで大変だったわ。」私は言った。
そうか――、とトーヤは言うと、ふふっと笑った。

「なんだか体がポカポカするなぁ。」

どうやら彼は暑いらしい。
「もうすぐ夏だから・・・」私は言った。
「そうか、地球にも夏はあるんだね。」トーヤが言った。
「えぇ。それに、あなた厚着しすぎなんじゃない？それじゃあ見てるこっちまで暑くなってしまうわ。」
「そうかなぁ？僕の国ではこれで十分なんだけどなぁ。」
「あなたの国の夏は暑くないの？」
「夏は、というか、僕の国は暑いという気候がないんだ。基本的に涼しい国みたい。」トーヤは言った。
「そうなの。」と私は言った。
「地球の夏は暑いのかい？」
えぇ――と言って私は話し始めた。
「地球の夏は本当に暑いわ。昼間なんて溶けてしまいそうなんだから。私は夏は嫌いだわ。」
私達のような、常に毛皮を羽織っている動物には、夏は地獄のようだ。
「なるほど。こんな綺麗な毛皮でも欠点はあるものなんだね。」と言うと、トーヤはそっと私の毛を優しく撫でた。
心臓は、より一層足早になった。
「次に来る時は、もう少し薄着をしてきたら？」
あぁ、そうするよ―と言って、トーヤは帰って行った。

本当は、もっと前から気づいていたのかもしれない。
私はそれを認めたくなくて、気づかないふりをしていたのかもしれない。
頭の中がトーヤでいっぱいだ。
とにかく、いつもいつもトーヤのことばかり考えている。
会えないと寂しい。会えると嬉しい。
こんな気持ちは、初めてだ。

――私、彼が、好き――

――トーヤが・・・好き――

薄汚い野良猫が恋に堕ちるなんて、馬鹿げているかもしれない。
しかも恋に堕ちた相手は、月の国の王子様。
夢物語もいいところだ。
だけど、好きで、好きで・・・それだけは唯一の真実。

思えば、初めて出逢ったときから、私は彼に惹かれていたのかもしれない。
真っ暗な闇の中に現れた彼は、眩しいほどの光だった。
こんな私の傍にいて、声を聞いてくれた。
そんな存在は、生まれてから一度だってひとりもいなかった。

彼は、私にとって光だった。

梅雨ももう終わる――、もうじき、暑い夏が来る――

第9話：～夏～　蝉しぐれ（前書き）

私は、トーヤが好き――
自分の本当の気持ちに気づいたレン。
ここから本当の恋物語が始まる。

第9話：～夏～　蝉しぐれ

暑い――
鳴り止むことを知らないかのように、蝉の声が響き渡る。
気温は毎日、三十度を余裕で上回っているらしい。

夏が来た――

昼間はほとんど、民家の床下に身を隠していた。この季節は、そういう場所の方がかえって過ごしやすい。
日中はとても、動きまわるなんてできなかった。
その間、私はトーヤのことばかり考えていた。
今何しているだろうかとか、何を考えているだろうかとか、恥ずかしい話だけど・・・
それと比例するかのように、恋人はいるんだろうかとか、どんな人が好きなんだろうか・・・などということも考えた。
だけど、結局どんなに問いかけても、一向に答えが出ないことに、少々腹が立った。
これが、誰かを愛する――、ということなのかもしれない。

私はトーヤが好き。でも、トーヤが自分のことをどう思っているかなんて、当然かもしれないが、どんなに考えてもわからなかった。
それに、正直、どう思われているかなんて、私にはそれほど重要なことではなかった。
”好きになってほしい”だとか、”恋人になりたい”だとか、全く望んでいないと言えば嘘になるけれど、それこそ正に夢物語で、私のような嫌われ者で薄汚い野良猫が、月の国の王子様につりあうはずがないと思った。

私には、トーヤに愛されることよりも、大事なことがあった。
ずっとずっとこのままでいたかった。
トーヤといろんな話をして、そんな関係を続けていきたかった。
私は、ただトーヤの傍にいられればそれで良かった。

「今日は君のいうとおり、涼しい服にしてみたよ。」
彼の上半身は、ワイシャツ一枚だけだった。いつも着ている
黒のジャケットと、青色のネクタイが無くても、それだけで十分
トーヤは輝いて見えた。
「そうね。それで袖が短ければ、きっともっと涼しいでしょうね。
」
私は言った。
「そうなのかい？でも、残念ながら僕は、袖の短いシャツは一枚も
持っていないんだ。僕の国の夏は、これで十分過ごせるから。」
そう言うと、トーヤは片方の袖を、肘のあたりまで捲くりあげた。
両方の袖を同じくらいの長さにすると、彼は言った。
「ほら、これで少しはいいんじゃないかな？」
私はフフッと笑って言った。
「そうね。ご苦労様。」
「地球の夏は大変だね。いつも、こんなに暑いんだろう？」トー
ヤは聞いた。
「地球は、それぞれの国によって気候が違うの。こんな暑い日が
一年中
続くところもあったり、夏でもあまり暑くないところもあるわ。」
「まったく、不思議な所だなぁ、地球って。」
「あら、私から見ればあなたも十分不思議だわ。」
それもそうか――とトーヤが言うと、私達は同時に笑い出した。
なんとも心地の良い瞬間だった。

「ねぇ、トーヤ？」ふと、私は言いかけた。
「なんだい、レン？」トーヤが聞く。
「私、あなたに聞きたいことがあるの。」
心臓が、いつもより早く脈打っていた。
「あなたには――・・」
”あなたには、恋人はいるの？”
言いたいことは決まっているのに、上手く言葉にできない。

「あなたの、家族のことを教えてほしいの！！」
結局、これが精一杯だった。自分にこんなに勇気が
無かったとは思わなかった・・・
「僕の家族？僕には父と母がいるよ。
父は、前にも話したように国王を務めている。父は国をとても愛してていて、
例えば、国民が困っていれば、僕らの生活を削ってでも援助をしようと
するし、父が言うには、国は国民がいなくて成り立たないらしい。
そんなことを言える父を、こう見えて僕は結構尊敬しているんだ。」
トーヤは続けた。
「母はとても優しい人だよ。それに、どんなに歳をとっても美しいと
僕は思う。年齢を感じさせない人なのかもしれないな。
植物を育てるのが好きで、母が育てた花はとびきり綺麗に咲くんだよ。
人々が言うには、”女王様の心が表れている”んだってさ。でも、おかげで
家中植物だらけだよ。」トーヤは言った。
本当に聞きたかったことではなかったけど、自分の家族のことを話すトーヤは、とても嬉しそうに微笑んでいた。

私はそんなトーヤを下から見上げて、私まで嬉しくなった。

第１０話：～夏～　悲しき恋よ（前書き）

トーヤがレンに、ふとこぼした言葉。それはレンにとって衝撃だった。

第１０話：～夏～　悲しき恋よ

「ねぇ・・・・」
「なんだい？」トーヤは答えた。
「あなたは、恋人とかいるの？」
ずっと聞きたいような、聞きたくないような、
そんな感じがしていた。だけど、聞きたい好奇心が
やや上回っていたみたいだ。

「めずらしいね。君がそんなことを聞くなんて。」
トーヤは私の方を見ながら、柔らかい微笑を浮かべ
ながら言った。
私は少し焦った――
「だって、あなたはとても魅力的だから、恋人くらい
いるんじゃないかって思って・・・」
上手くごまかせただろうか。心配だ。
恋人か――、とトーヤは言った。
「相手が僕のことを、どんなふうに思っているかは
わからないけど、僕がとても大事だと思っている人はいるよ。」
一瞬、自分の周りだけピタリと時間が止まった。
「そう――」と私は言った。
「どんな人？」
「とても素敵な人だよ。君に少し似ている。」そう言うと、
トーヤはにっこりと私のほうを見ながら笑った。

――彼はきっと、恋人を心から愛している――
それは確信だった。
トーヤの目を見れば、トーヤの微笑みを見ればすぐにわかった。
恋人への強い想いが、確かに彼にはある。

胸が、締め付けられるように痛い。
だけど、恋人のことを語るトーヤの目が、私には愛しかった。
私はトーヤが好きで、でも彼には他に想う人がいて、それは私じゃなくて・・・・
私の想いは届くことはない――
そんなことは知っていた。気がついていた。
それなのに、私は愕然となった。

傍にいられればそれで良かった。
ずっとずっとこのままで――
だけどきっと、私もどこかで期待していたんだ。もしかしたら奇跡が起こるかもしれないって。
トーヤに、好きになってもらえるんじゃないかって。
自分を下目に置いておけば、そうなるんじゃないかって、本当はずっと思っていた。
私は、そんな卑怯なことを考えていたの。
トーヤの目を見て私は目が覚めたみたいだ。
私に勝ち目はない――
行き場を失くした私の想いは、真っ暗闇を彷徨っていた。それは、例えようのない寂しさを与えた。

想う気持ちは確かで、こんなにも近くにいるのに、決して届かないもどかしさ。
そして、どんなに押し込めても、偽れない欲が私にもある。
そんな中で誰かを愛することに、私は少々疲れ果てていた。
瞬間、よぎったのは、好きな気持ちを押し込め、蓋をすることだった。
――私はトーヤを好きじゃない――
私はひたすら自分に言い聞かせた。

気持ちを押し殺せばもう、あんな想いはしなくてすむ。それなのに、
言い聞かせればするほど、トーヤへの想いは溢れていった。
簡単に忘れられるほど、私の中のトーヤは小さな存在ではなかったのだ。
こんな悲しみとは裏腹に、蝉は今日も争うかのように鳴いていた・・・

第１１話：～夏～　星の下

決して届かないと知った想い、そしてそれを
忘れることも出来ない。
私は、どうすればいいのかわからない――

「どうかしたのかい？」トーヤが聞いてきた。
「何が？」私も聞いた。
「今日は何だか、いつもと違う気がする。元気がないみたいだ。何かあったのかい、レン？」
何か、なら確かにあったが・・・・
「そうね、でも、ちょっと上手く言えないの。ごめんなさい。」私は少し下を向いて言った。
「そっか。それなら無理には聞かないよ。誰でも、言いにくいことのひとつやふたつあるものだからね。」
「ありがとう。」私は礼を言った。
「いいんだよ。もし、僕が何か力になれることがあったら、いつでも言ってよ。僕にできることなら何でもするから。」
相変わらずトーヤは優しかった。
やっぱり私はこの人が好きだ――

トーヤの傍にいたい。
それだけは心の奥深くからの願いだった。
私にとってトーヤは居場所だった。
どこへ行っても嫌われてばかりで、邪魔者だった私。トーヤの傍にいると、そんな自分をほんの少しだけ好きになれた。
そんな温かさを与えてくれたのは、他の誰でもないトーヤだった。

愛されたら確かに嬉しいだろう。だけど、それが
叶わないのなら、せめてずっと彼の傍にいさせてほしい。
それが、私の彼を想う愛の形なのだ。
これからもトーヤを好きでいよう。
愛する人を想うトーヤを好きでいよう。
私はそう決めた――

「今日はあなたの方が元気がなさそう。」
その日、光の中から現れた瞬間から、私はトーヤの様子が
違うような気がしていた。
「もし、私が聞いてもかまわないことなら話してみて？
私も、あなたが言ってくれたように、私があなたのために
できることなら何でもしてあげたいの。」私は言った。
実は・・・と言ってトーヤは話し始めた。
「僕がよく仕事を手伝っていた、農場を経営する老夫婦の
奥さんが、数ヶ月前に病気になって倒れたんだ。
その後、旦那さんが必死に看病していたんだけど、昨日、
息を引きとられて・・・」
「亡くなってしまったのね。」
「あぁ、とても仲が良い夫婦で、僕も大好きだった。」
トーヤの悲しさは、私にも伝わった。

「レン、人は死んだらどこへ行くのかな？」トーヤが聞いた。
「天国じゃないの？」私は答えた。
「天国って、本当にあるのかな？誰も見たことはないんだろう？」
確かにそうね――、と私は言った。
「星に、なるんじゃないかしら？」わたしはふと言った。
「えっ？」
「ほら、よく言うじゃない。死んだ人は、生きている人を

見守っているって。あれは、空の星になって、見下ろしているんだと思うの。」

私は続けた。

「その農場の奥さんは、きっと空に無数に散らばる星のひとつになったのよ。そして、旦那さんやあなたのことを見守ってくれているはずよ。例え自分がいなくなっても、あなた達が幸せであるようにって。」

「そうかな？」トーヤは言った。

「私はそう思う。」

「そうか。星になるのか・・・それは素敵だな。」

そう言って、トーヤは夜空を見上げた。

いつか私が死んでしまったら、その時は星になれたらいい。トーヤだけを照らす星になりたいと思った。

あの眩しいほどの太陽には敵わないだろうけど、それでも、彼のいくらかの助けにはなれるはずだ。

第12話：～晩夏～　涼夜

少しずつ、夜に涼しさが戻ってきている。
トーヤは相変わらず、上着とネクタイは身につけていなかったが、シャツの袖を捲り上げなくなった。
もうじき、トーヤと出逢った季節が来る。

「アキなんてあるのかい？」、とトーヤは言った。
夏の次は何か、とトーヤが聞いたので、私は秋が来ると言った。
「それじゃあ、あなたの国では夏の次はもう冬なの？」
「気温は少しずつ下がってはいくけど、その間はまだ夏で、アキと呼ぶ季節は僕の国には無いよ。」トーヤは言った。
「レン、アキは何があるんだい？」トーヤが聞いた。
「そうね・・・秋は短いから、あっという間に冬になってしまうのよ。でも秋の特徴って言ったら、木の葉が赤や黄色に変化することかしら。」私は言った。
「葉が赤や黄色に？すごい！！」トーヤは驚いていた。
「そんなにすごいかしら？」
「だって、この緑色が、赤や黄色になるんだろう？」とトーヤ、空き地に生えている草やらをつかみながら言った。
「そういうのは変化しないけど、そうね・・・」
私は辺りを見回した。
「トーヤ、あの赤い屋根のところに立っている木が見える？」
近くの古ぼけた民家に、紅葉の木が立っていた。
「あぁ、見えるよ。不思議な形の葉だね。」
「あれは紅葉という木なの。今はまだ緑色でしょ。」
うん――、とトーヤは言った。

「あの緑色の葉が、秋になると赤色になるわ。とても綺麗よ。」
私は言った。
「そうなのか・・・いつごろ色が変わるんだい？」トーヤが聞いた。
「そうね・・・だんだん涼しくなってきたし、もうすぐじゃないかしら？」
「楽しみだなぁ。早く見てみたい。」

「私があなたに初めて逢ったとき、ここは秋だったわ。」私は言った。
「え？そうだったのかい？」
「そうよ。覚えていないの？」
「うーん・・・今よりももう少し涼しかったような気はするなぁ。そうか、僕がここに来て、もうそんなになるんだね。」
私達は、気がついたらいくつもの季節を一緒に越えていた。
「僕は、ひとつの場所にこんなにも長くいたことは、今まで一度もなかったんだ。」
「あなたとこんなにも一緒にいるなんて、会ったばかりの頃は思ってもいなかったわ。」私は言った。
「それは僕も同じさ。それなのに、今じゃあ君がそこにいることがあたり前のように思っているんだ。」トーヤは言った。
嬉しかった。トーヤはいつも私の不意をつく。

「そろそろ時間だ。行かなくちゃ。」トーヤは言った。
「もうそんな時間？早いわ。」
いつの間にか、1時間が経過していたらしい。
いつもそう。もっとトーヤといたいのに、気がつけば午前1時になっている。いっそのこと、時間が止まってしまえばいいのに――
「次に来る時はアキかな、レン？」
「どうかしら・・・夏から秋へはあっという間だから・・・

もしかしたら秋になっているかもしれないわね。」
「そうか、だといいなぁ。」

「それじゃあまた。おやすみ、レン。」
「おやすみなさい、トーヤ。」
トーヤは光に包まれて消えた。

煩い蝉の音も少しずつ減ってきている。
もう夏も終わる。
トーヤと出逢った季節はもう目前。
さぁ、次は彼とどんな話をしようか――

第１３話～立秋～　秋の夜長

夏の暑さは跡形も無く消えた――秋、到来。

トーヤの服装は、出逢った時と同じに戻った。
「あなたは寂しいと思うとき、ある？」私は聞いた。
「あるよ。」
「どんなとき？」
「地球への橋が出ないとき。」
そう言うと、トーヤは私のほうを見てフフッと笑った。
ドキッとした。
「どんな感じがするの？」
「うーん、どんなって言われると、どう説明していいのか
わからないんだけど、そうだなぁ・・・・いつも見慣れてる、
そこにあってあたり前のようなものが、急に無くなって
しまった時の気持ちのみたいなものじゃないかな？
どこか物足りないような、心に小さな穴がポッカリと空いて
いる感じ。」とトーヤは言った。
「そう・・・。」
それならやっぱり、トーヤに会えない夜の、どうにもいたた
まれない気持ちは、寂しさからくるものなのかもしれない。

ねぇ、レン――とトーヤは言ったので、私はなぁに？と答えた。
「君は前に、いつもひとりだって言っていたよね。」
「えぇ、言ったわ。」
「どうしてだい？」とトーヤは聞いた。
どうしてって言われても・・・・私は少し返答にとまどった。
そんな私に気づいたのか、トーヤは、
「ごめんよ。もし、言いづらいのなら話してくれなくていいんだ。

僕も、少し軽率だったよ。本当にごめん。」と言った。
「謝らないで。別に話したくないわけじゃないの。ただ、何から話していいのかわからなくて・・・」
「私がいつもひとりなのは、他にいつも一緒にいる猫がいないからよ。」私は言った。
「君、家族は？」トーヤが聞いた。
「母親はいたんでしょうね。でなければ、私は今ここにいないもの。
だけど、顔は全く覚えていないし、兄弟でさえ、いたのかどうかわからないわ。」
「飼ってくれる人はいないのかい？」
「いないわ。私は、生まれてから一度も人に飼われたことがないの。
だから名前もなかったし、帰るところもないわ。」
「人間が嫌い？」
「わからないわ。人間がどういうものなのか、私にはわからないから。
それに、私が嫌っていると言うよりも、人間の方が私を好まないみたい。」
「そんなことはないと思うけど・・・」とトーヤは言った。
「私は、ずっと人間に『不吉だ』とか、『汚らわしい』とか言われてきたの。だから、それが真実なんだと思う。」私は言った。
すると、トーヤが言った。
「そんなことはないよ、レン。前にも言ったけど、君のその黒色は綺麗だ。僕は心からそう思うよ。」真剣な目でトーヤは言ってくれた。
「そんなことを言うのはあなたくらいよ。でも、とても嬉しいわ。ありがとう。」

トーヤだけが私を解ってくれる。それは私にとって救いだった。
「自分の生きる道を恨んでいるかい？」トーヤは聞いた。
そうね・・・と言って私は話し始めた。
「そう思ったことも確かにあったわ。好きで黒猫に生まれたんじゃないのに、私が何をしたの――ってね。でも、どうやったって私は私で、
他の何者にもなれないじゃない。だから、私で生まれたい以上、私で生き
なければいけないのよ。」私は言った。
「うん。それは確かにそうだね。僕も、王子を辞めたいと思ったことあるよ。」
トーヤは言った。
「あなたもそんなこと考えるの？」私は少し驚いた。
私とは全く違う生き方をしているトーヤに、辛いことなんてひとつも無い
と思っていた。
「もちろんあるとも。いろんな人から尊敬されたり、すばらしい人だって
言われるけど、正直僕はそれほどできた存在じゃないんだよ。苦手なことも、
嫌いなこともある。時にはそれをごまかしたりだってしているんだ。そんな
奴を敬うなんて、国民を騙しているみたいで苦しかった・・・」
「そう。あなたもそんな風に思うのね。」私は言った。
悲しみを抱えているのは、私だけではなかった。私はずっと、自分だけがこんな想いをしているのだとそう思っていた。だけどもしかしたら、誰もが少なからず、何かしらの痛みを抱えているのかもしれない。
「でも、レンの話を聞いて、僕もちょっと頑張ろうと思う。みんなの期待

に答えられるように。」とトーヤは言った。
「応援するわ。でも、あなたらしさをなくすのは良くないわ。」
「そっか。それは大事だね。難しいけど、頑張ってみる。」
えぇ――、と私は言った。

「私ね、最近悪いことばかりじゃないって思うようになったの。ずっと
ひとりで、平凡に毎日を過ごしていた私に楽しみができたように、良いこと
もちゃんとあったりするのよ。」と私は言った。
「じゃあ、君は今幸せかい？」トーヤは聞いた。
「さぁ・・・そういうことあんまり考えた事無いから。でも、不幸せではないわ。」
それだけは胸張って言えた。私の人生は、それほど捨てたものじゃないの
かもしれない。
「君は、素敵だね。」とトーヤは言った。
どうして――、と私が聞くと、トーヤは私の方を見て、ただにっこりと笑った。
「ところで、さっき言った、君の楽しみって？」
知りたい？――、と私は言った。
知りたい――、とトーヤは言った。
「あなたと、ここでこうしていることよ。」

第１４話：～秋～　落葉（前書き）

叶わない恋をすると決めたレン。トーヤの一言は彼女に何を思わせるのか。

第１４話：～秋～　落葉

すっかり赤に色づいた紅葉を見たときのトーヤは、本当に嬉しそうだった。
「すごい。本当に赤色になってる。」
「ね、私の言ったとおりでしょ？」私は言った。
「あぁ。この間は緑色だったのに、今じゃあどこにも緑が見当たらない。」
「他に、葉が黄色になる木もあるのよ。」と私は言った。
「本当かい？それもぜひみて見てみたいなぁ。」
丁度、近くにイチョウの木が立っていたのを思い出した。
「着いてきて。」と私はトーヤに言って歩き出した。

イチョウの木は、紅葉が立っていた民家の裏路地を、しばらく進んだ突き当たりにひっそりと立っていた。それもまたみごとな黄色で、秋そのものを感じさせた。
「この木はイチョウと言うの。この木の葉は、緑色だったのが、秋になるとこうして黄色になるのよ。」と私はトーヤに説明した。
「赤色だけじゃなく黄色もあるなんて・・・本当にすごいよ、レン。」とトーヤは嬉しそうに言った。
「ねぇ、レン。この木、葉が不思議な形をしている。」とトーヤは私を見て言った。
「えぇ、そうよ。それがこのイチョウの特徴なの。」
「そうなのか・・・」トーヤはもの珍しそうに、しばらくイチョウの葉を眺めていた。

あのさ、レン――とトーヤは言った。
「なぁに？」私は答えた。
「・・・・・・。」
トーヤは俯いて黙ってしまった。
両手を膝の上で固く握り締めたまま、何かを考えている様子だった。
私は、トーヤが話してくれるまで待つことにした。
長い沈黙の後、決心が固まったのか、トーヤは顔を上げて、口を開いた。

「実は、ある人にすごく伝えたいことがあるんだ。でも、僕はなかなかそれを伝えられなくて、どうしても言葉にならないんだ。ねぇ、レン。そんな時はどうしたらいいと思う？」
トーヤは少し困っている様子だった。
そうね・・・と私は言った。
「あなたは、例えばそれを伝えないままだったら後悔しない？」
トーヤの質問に対して私は答えた。
後悔――、とトーヤは言った。
「あなたが後悔しない方法をとることが一番いいと思うわ。でも、覚えておいて。言葉にしなければ、伝わらない想いもあるのよ。」
――言葉にしなければ伝わらない想い――
これは、私がトーヤに言ったようで、実は自分自身にも言っていた。
だけど、聞こえないフリをした。
「そうか、そうだね。ありがとう、レン。君に話してよかったよ。」
「どういたしまして。ところで、あなたは何を伝えようとしているの？」私は聞いた。
「うん、プロポーズさ。」トーヤは照れくさそうに笑って、私の

方を見た。

――今、彼は何と言った？――

「あなた、結婚するの？」思わず私は聞いた。

「さぁ。彼女がＯＫしてくれればね。」とトーヤは言った。

いつまでも照れたような微笑を浮かべるトーヤ。

幸せそうで、嬉しそうで・・・・

私はトーヤの笑顔が好きだった。だけど、その時だけはただ悲しかった。

「受けてくれるといいわね・・・。」

私は、心の奥に澱みのようなものを感じていながらも、トーヤに言った。

秋色に染まった葉が、一枚、また一枚と、木から落ちていく。

それは、私の心を象徴したように見えた。

私の想いも、あんな風に散ってしまうのだろうか・・・・

第１５話：～秋～　冷たい秋風

秋は短い。季節を感じさせた木の葉は、日に日に枝から離れ、どの木もすっかり寂しくなってしまった。
風も、以前に比べて冷たくなってきているようだ。
冬の近さを肌で感じていた――

「いつも上着を借りて悪いわ・・・」肌寒い日々になり、トーヤはまた私に、自分の着ている上着を貸してくれるようになった。
「だって寒いだろう。僕のことなら気にしなくていいよ。前にも言ったように、地球の寒さは僕にとっては全然温かい方なんだ。」とトーヤは言った。
「私だってこれくらいはまだ平気よ。」と私は言った。
トーヤは、そうかい――、と言うと、その大きな手で私の背中を優しく撫でた。
「こんなに体を冷たくしているのに？」と彼は言った。
確かに体は冷えていた。
「僕が好きでやっていることとんなんだ。本当に気にしないでくれよ。」
「どうもありがとう。」私はトーヤの優しさに甘えた。
トーヤを見て、時々衝動に駆られる。
――私の全てを受け入れて欲しい――
駆け出して、何もかも委ねたくて、すがりつきたくなる。
私は弱い。
本当はとても弱い。
そんな自分を見せたくなくて、いつも強がってきた。強くなんてないのに、そんな自分を必死に隠してきた。
トーヤなら、そんな、弱い自分も、強がっている自分も全て

受け入れてくれるように思った。そんな確信なんてどこにも無いのに、彼の存在がそうさせた。
ひどく勝手な言い分だけど・・・・

「もう冬になるのかい？」トーヤは言った。
「そうね。もうだいぶ寒くなってきたし、そろそろ冬ね。」
「じゃあ、またユキが見られるのかい？」
トーヤは随分雪が気にいったらしい。
「すぐには降らないと思うけど、その時が来たらきっとまた振るでしょうね。」私は言った。
「そっか。楽しみだなぁ。」
「そんなに雪に興味があるの？」私は聞いた。
「まぁね。地球は、僕の国に無いものがたくさんあるから。」
「でも、雪が降ったら月がなかなか出なくなるわ。」
また、トーヤと会えない日が続くのかと思うと、冬になんてなってほしくないと思った。
そうか――、とトーヤは言った。
「僕は必ず会いに来るよ。」トーヤは言った。
「えっ？」
「月の出る夜は、必ず君に会いに来る。突然辞めたりはしない。約束するよ。」とトーヤは言った。
そんなことを言われたら期待してしまう――
あまり期待しないでおこう。
そう言いつつも、陽気になる気持ちを抑えることはできなかった。
もうすぐ、トーヤと過ごす二度目の冬が来る。

第１６話～夢～　儚き幻想

温かさなど感じたことがなかった。
自分は汚れていて、嫌われ者だとそう信じていた。
誰もが私にそう言っていたから。

ある日突然出逢った人は、私の心を揺さぶった。
ずっとすっとひとりぼっちだった私。
恐いものなんてひとつもなかった。
だけど、その人と出逢った事で、私はひとりが
恐くなった。

胸の奥にはいつも、誰かを想う愛しさがあった。
あの人が愛しい――、と今日まで何度思った
ことだろう。
それが、例え叶わず散ってしまうとわかっていようと、
簡単に諦めきれるほど、私は彼を生半可に愛してはいない。
それは揺るぎない真実――

――夢を見た――
トーヤの夢だった。
詳しくは覚えていないけど、あれは確かにトーヤで、
そしてとても幸せな夢だった気がする。
夢は、その人の見たいものや願望が現れると聞いた
ことがある。もしそうなら、あの夢は私の欲望だったの
かもしれない。

目を覚ました瞬間は、どこか切なかった。嬉しい夢を
見たのに、寂しさを感じた。

トーヤに夢で会えたことは嬉しかった。
会いたいときに会えない私にとって、それは心からの喜びでもあった。

でも所詮は夢だ。
いつかは消えて、嫌でも現実に引き戻される。
目が覚めるとそこは、見慣れたどこかの路地裏の、真っ暗な隅っこだった。そんな所にトーヤがいるはずもない。
私が切なく思ったのは、夢の中でのトーヤを、あまりにも鮮明に、色褪すことなく覚えていたからかもしれない。
突然飛び込んできた現実に、彼はいないから・・・
だけど心地良いひと時だった。

また、夢で会えるといい――

第17話：～冬～　後悔（前書き）

これは決して叶わない恋・・・

レンの恋心は切なく、けれども美しい。そんな彼女に、またもや恋の神様から切ない仕打ちが与えられる。

第17話：～冬～　後悔

冬になった。
何度も冬は経験しているのに、毎回訪れることにやっぱり寒いと感じる。
トーヤと過ごす、二度目の冬・・・
これからもずっと、時々会える彼とこうしていくつもの季節を一緒に過ごしていけたらいい。

「やぁ、すっかり寒くなったね。」
冬になって最初の月の夜だった。
「えぇ、本当に。でもまだ雪が降るには早いみたい。」
「そうか、でもいずれは降るんだろう？楽しみは後にとっておくさ。」とトーヤは言った。
またトーヤと一緒に雪が見れるのは嬉しかった。
「あのさ、レン。」トーヤが言った。
「何？」
「君にも、一応伝えておこうと思って・・・」
少しの沈黙があった。

「僕、結婚するんだ。」

鋭利な刃物のようなものが、自分の胸を刺しているような、するどい痛みが走った。
――今、彼は何て言った？――
私は思わず耳を疑った。
「なかなか結婚しようって言えなくてね、でも、この前君に話したおかげで勇気が出たんだ。それに、彼女も受けてくれて本当に嬉しかったよ。」

幸せそうに笑うトーヤ。それは今まで私が見た中で、最も嬉しそうに微笑む彼だった。
「すべて君のおかげさ。本当にありがとう、レン。」
「よかったわね。おめでとう・・・」私は言った。
そんな、心にもないことを言うなんて、トーヤにきっと失礼だ。だけど、こう言うしかなかった。
仕方なかったことなのかもしれない。
トーヤは私の気持ちなど知らないのだし、知っていたとしても、叶わない恋であることに変わりはない。
胸が張り裂けるように痛い。だけど私は平気なフリをした。
トーヤを困らせてしまうと思ったから。

「お相手は、あなたが前に話した恋人さん？」私は聞いた。
「うん。」トーヤは少し照れていた。
「そういえば、あなたは私に、その恋人に似ているって言っていたわよね。どんなところが似ているの？」
「すべてさ。彼女の髪の色は、とても綺麗な黒色なんだ。君の色と本当にそっくりなんだ。それに、魅力的で、優しくて、名前さえもそっくりさ。」
名前？――、と私は聞いた。
「彼女も、『レン』という名前なんだ。」とトーヤは言った。

――レン――
トーヤが私につけてくれた名前。
名前のなかった私に初めて、彼はつけてくれた。
私は、トーヤと初めて逢った時のことを思い出した。
”黒髪の綺麗な知り合いがいる”とトーヤは言っていた。それは、恋人のことだったのだ。
もしも、その時彼に恋人がいると気がついていたら、彼を好きにはなっていなかったかもしれないのに。

こんな想いも、しなかったかもしれないのに・・・
「あぁ、もう時間だ。それじゃあ僕はこれで。」トーヤは言った。
「えぇ。」
光り始めたトーヤの体。なんて綺麗なのだろか。
「トーヤ！！」私は叫んだ。
「幸せに・・・・」
優しい微笑みを返し、トーヤは光と共に消えていった。

トーヤが去ったあとの空き地は、いつもどおり、何事もなかったかの
ように静けさだけが広がっていた。
そこに漂う冬の冷たい風。まるで自分の気持ちを表現しているみたい。
涙が溢れそうなのを、私はグッとこらえていた。
――幸せに・・・――
悲しくて悲しくてたまらなかったはずなのに、そんなことをどうして
言ったのだろう。
何となく言いたかった。理由は本当にそれだけだった。
どうか幸せであって――
それは想いの届かない私の、最上級の祈りかもしれない。

冷たい風が私の体を横切る時、この悲しみも一緒に、どこかへ吹き流れてしまえばいいのに、と、そう思った。

第１８話：～冬～　寒風に消える声

「好き」な理由はわからない。
なぜこんなにも惹かれてしまうのか――
気がつけば私は、トーヤのことを考えない時など無い
くらいになっていた。頭の中は、とにかく彼でいっぱいで、
どうしようもなかった。
彼のことが好きで好きでたまらない・・・
誰かを愛することは、きっと簡単だろう。それなのに、自分の
愛した人に愛されることは、なぜこんなにも難しいのだろうか。

相変わらず胸の奥は悲鳴をあげそうなほど痛い。
なかなか月が出ず、トーヤに会えない日が続いている。
――トーヤ、あなたは今、何をしているの？――
――あの恋人と一緒なの？――
不思議なことに、心は悲しみに埋もれていても、トーヤを想う
気持ちは変わらず、それもまた切なかった。
このまま、どこかへ行ってしまおうかと考えた。私は野良猫、
いつだって行こうと思えば何処へでも好きな所へ行ける。
突然私がいなくなっても、迷惑がかかる者はいない・・・
トーヤの顔が浮かんだ――
もしも、突然私がいなくなったら、きっとトーヤは悲しいだろう。
それは嫌だ。それだけは嫌だ。
このまま彼に会えなくなるのは嫌だ・・・

久しぶりに月が出た。
「やぁ、やっぱり月がなかなか出ないものだね。」トーヤが言っ
た。

何日かぶりにトーヤに会う。
「仕方がないわ。ここはそういうところだもの。」私は言った。
「そういえば、結婚式はしないの？」私は聞いた。
「式は挙げるよ。でも今はとても寒いから、暖かくなってからにしよう
って、彼女と決めたんだ。」彼は笑いながら言う。
そう――、と私は仕方ない気持ちで言った。
「良い天気になるといいわね。」
彼にとって最高に幸せな日は、そんな彼らを祝福するかのように、どうか
まぶしい陽が絶えなく照る陽気な日でありますように・・・
私はひとり祈った。
「そうだね。天気にもめぐまれるといいなぁ。」トーヤは言った。

「ねぇ、トーヤ？」私は言った。
「なんだい？」
「あのね・・・・・」

――私、あなたが好き――・・・

「いいえ、なんでもないわ。ごめんなさい。」
「なんだい、おかしな猫だなぁ、君は」トーヤはフフッと笑をこぼしながら
言った。
言えるはずなどなかった。
こんなにも、こんなにも近くに居るのに、どうしてこの想いは届かないのか。
それでも、こうして時々会って話をする。わずかな時間でしかないけれど、
もうそれだけで十分だった。

彼の傍にいられることが、何よりもの救いだった・・・

第１９話：～冬～　違和感

あの後も、何日か月の出ない夜が続いた。
そして、ある日昇った月は、どこか違和感があった。
見ればいつもと同じ月なのに、でも何かが違う。
その『何か』は、私にもわからなかった。
きっと気のせいに違いない――、そう思って私は、
今夜もトーヤを待った。
月は空高く昇り、時刻は午前１２時になる。
もうじきトーヤが、微笑みながら光の中から現れる。
――早く、トーヤに会いたい――

光が現れない――
時刻は確実に、午前１２時を過ぎている。
私は空を見上げた。間違いなく月は出ている。
それなのにトーヤは来ない。
どうしたのだろう？
もしかしたら、今夜は少し遅くなるのかもしれない、
私は確証もないのにそう思った。
私はひたすらトーヤを待った。
時刻は午前1時になっていた。トーヤはまだ来ない。
この空き地は、風通しだけは良い。おかげで、冬の
寒い風が、痛いほど横切る。そんな中で、私はただただ
トーヤを待った。
私がしていることは、もしかしたらすごく馬鹿げている
ことなのかもしれない。
――あと1時間待ってもトーヤが来なかったら、行って
しまおう――
そんなことを繰り返しているうちに、周囲は明るくなり、

夜が明けた。気がつけば、一晩中空き地に佇んでいた。
体はひんやりと冷たかった。

ついにトーヤは来なかった・・・
空は明るくなり、月は消えた。
――月の出る夜は、必ず君に会いに来る――
トーヤは確かにそう言った。それなのに、彼は来なかった。

――トーヤ、トーヤ、トーヤ、――・・・

私は嫌われてしまったの？
地球に来るのが嫌になったの？
ねぇ、答えて。お願い、トーヤ・・・・・
伝わることの無い声が、寒風に連れられて消えていった。
不安が、胸を競りあげる――

第２０話：～冬～　約束と願い（前書き）

大好きなトーヤとずっと一緒にいたい。そんなレンにトーヤから、悲しい宣告が告げられる。

第２０話：～冬～　約束と願い

あの次の日の夜も、月は出た。
いつもなら、何も気にせずあの空き地へと駆けていくのに、今夜は手足が重い。
――今夜は来るだろうか――
――また、現れなかったら・・・――
突然トーヤに会えなくなるのは恐怖でもあった。
もしも、もう二度と会えなかったらどうしよう。
言いたいことは他にもたくさんあるのに。
まだ”好き”とも伝えていないのに・・・
そう思うと、とにかく恐かった。
今夜も来ないかもしれない――、という不安。
今夜こそは来るだろう――、という希望。
それらは、均等に私の思考を支配した。

私は空き地へと足を運んだ。
不安と希望に挟まれながらも、私は”来るだろう”という希望を信じたかった。
トーヤを信じたかった。
もうすぐ時刻は午前１２時を刻む。
――お願い、もう一度トーヤに会わせて――
今はとにかく、彼に会えればそれで良かった。

午前１２時――
目の前に光が現れた。
トーヤが来た。
「トーヤ！！」私は夢中で叫んだ。

「レン！」トーヤは言った。
やっと、会えた――
「この間はごめんよ、レン。あっちで用事があって、どうしても地球へ来ることができなかったんだ。必ず来ると言ったのに・・・本当にごめん。」
「そんなに謝らないで。あなたはこうして、またちゃんと来てくれたじゃない。それだけで私は十分よ。」
ありがとう――、とトーヤは言った。
彼は岩に腰を下ろすと、ふぅっと軽く息を吐いた。
トーヤはどこか思い悩んでいるような顔だった。
そして、しばしの沈黙。
「どうかした？」私は聞いた。
うん――、と彼は言うと、ゆっくりと重たい口を開いた。
「君に、話さなければならないことがあるんだ。」トーヤが私の方を向いて言った。
彼の目は、いつにも増して真っ直ぐだった。
「何？」
「近いうち、僕は王位継承のための見習いにつかなければいけないんだ。」
「王様になるの？」私は聞いた。
「いや、それはもっと先の話さ。ほら、前にも話しただろう、いずれは王位を継ぐための勉強期間みたなものが与えられるって。その時が来たのさ。」
「すごいじゃない。あなたなら、きっと立派な王様になれるわ。」
ありがとう――と、トーヤは言った。
「でも、ここからが大事なことなんだ。よく聞いて。」トーヤは言った。
「えぇ・・・」
「見習い期間に入れば、今までのような自由は利かなくなるんだ。」

彼は続けた。
「レン、ごめんよ。僕はもうすぐこの地球へ来られなくなる。」
「――――・・・」
それは突然にだった。
「いつになったら来られなくなるの？」私は恐る恐る聞いた。
「おそらくは、この地球が春になる頃だろう。覚えているかい、レン？以前、次の春もサクラを一緒に見ようと言ったことを。」
「えぇ、覚えているわ。」
「その約束を果たしたら、僕は月へ帰るよ。」
「そうしたら、もう、ここへは来ないの？」
「あぁ。」
「月が出ても？」
「残念だけど――・・」
「そんなの嫌だわ！！」
「僕だって同じさ！レンに会えなくなるのは嫌だ。だけど、ごめん。
僕には他にも守りたいものがある。」
トーヤが守りたいもの――、その中には、私は入っていないのだろうか。
「サクラが咲くまでの間に、あと何度月が出るかはわからない。だけど今度こそ、月の出る夜は必ず僕は君に会いに来るよ。約束する。」
とトーヤは言った。
辛いのはトーヤも同じなのだ。それが痛いほど伝わった。
「トーヤ・・・」
「一緒に、サクラを見よう、レン。」とトーヤは言った。
「えぇ、楽しみにしているわ。」

もうすぐ1時間が経つ。
「時間だ。もう行かなくちゃ。」
それじゃあ、また――とトーヤは言った。
私は一言も返さず、ただ静かに、光に包まれて消えていくトーヤを見送った。

彼が好きで好きで、とにかく好きで、恋人がいようと、自分に勝ち目
など無かろうと、その気持ちは変わらなかった。
傍にいられることだけが、私にとっては唯一の救いだった。
ずっとずっと彼の傍にいたい。
他には何も要らない。
この先、自分が生きていく中に、どれ程不幸が与えられても構わない
から――

――どうか、愛する人の傍にいさせてください――

――トーヤの傍にいさせてください――

――神様・・・――

生まれて初めて神に祈った。
祈る相手など、もう誰でもいい。この願いを叶えてくれるのなら・・・

第２１話：～冬～　初雪

街は一面銀世界――

「ユキだ・・・」とトーヤは言った。

「あなたが待ち望んでいた雪よ。この間、ようやく降ったの。」

「もう一度見れて嬉しいよ。」

きっとこれが、トーヤが見れる最後の雪だろう。この辺は、比較的に気温が高めなために、雪はたくさん降らず、降ってもすぐに溶けてしまう。

この雪も、夜が明ければ跡形も無くなってしまうだろう。

トーヤは、雪を何度も手で掴んだり、観察するかのようにじっと見たりしていた。それはまるで、雪の感覚を忘れてしまわないためのように思えた。

そうだ――、と彼は言った。

「寒いだろう、どうぞ。」と言って、トーヤは私に上着をかけてくれた。

彼の態度は、以前とそれほど変わってはいない。

ねぇ――、と私は言った。

「強がってる？」私は聞いた。

「どうして？」とトーヤは答えた。

「本当は、悲しくて笑ってもいられないんじゃない？」

「レンはするどいな。」

「悲しい？」

うん――、と彼は言った。

「悲しいけど、そうも言ってられないし、それに、僕がそんなんじゃあ、君に失礼だと思ったからね。君はどうだい？」トーヤは聞いた。

「あなたと同じよ。」
そうか――、とトーヤは言った。
「あのね、トーヤ。」
「何？」
「私、あなたと話していると、とても楽しいの。こんなに私の声を聞いてくれる存在は、同じ猫にだっていなかったわ。だから、あなたにとても感謝しているの。」私は言った。
「うん。」
「私、あなたに出逢えてよかったわ。」
「僕もさ。」

――出逢えてよかった――
トーヤに出会って、私はいろんなことを知った。
”寂しい”という気持ち。
”好き”という気持ち。
誰かに会いたくなる衝動。
好きな人に恋人がいて、それがとても切なかったこと。
決して届かない想いであることを、受け入れること。
叶わない恋でも、不幸せではないこと。
そして――
愛することの喜び。
きっとすべて、トーヤじゃなかったら、私は知らないままだった。
トーヤを愛さなかったら、知らないままだっただろう。

第２２話：～初春～”ひとりじゃない”（前書き）

”トーヤとずっと一緒にいたい”
その願いさえも、儚く散った。
レンの悲しい恋、別れはもうずぐそこに・・・

第２２話：～初春～”ひとりじゃない”

初めて雪が降ってからしばらく経った。
季節は春目前。
桜の開花にはまだ程遠いが、寒かった冬の名残も
少しずつ消えていっている。

「レン、君は前に、自分はひとりきりだって言っていたね。」
トーヤは言った。
「えぇ、言ったわ。」
「今でも、そう思ってる？」彼は聞いた。
「どうして？」
「君は、ひとりぼっちなんかじゃないよ。」トーヤは言った。
私は、トーヤのその言葉の意味がわからなかった。
「突然、何を言うの？」私は言った。
「僕がこの地球と言う星に来たのは、今からもうずっと前だ。
それなのに、今も僕はこうして時々地球に来ている。それができたのは、レン、君がいてくれたからだ。」
彼が話すのを、私は黙って聞いていた。
「もしも君がいなかったら、僕はサクラの美しさや、ユキの冷たさ、
多くの地球の不思議を知らないままだった。」
「私はそんなたいしたことはしていないわ。」私は言った。
「いいや、地球にいる間、僕にとってはレンは大事な存在で、とても
必要な存在だったんだ。」
彼は続けた。
「だから、君はいつも嫌われてばかりだと言っていたけど、そんなことは

ない。君のことが必要で仕方ないと思ってくれる存在は必ずいる。」
「そうかしら・・・」
「必ずいるさ。僕のような存在が、これからもきっと現れる。」
トーヤは
言った。
「だといいわ。」
トーヤは、強い真っ直ぐな目で私を見て言った。

「君はもう、ひとりなんかじゃないよ・・・」

「ありがとう。」私はお礼を言った。
最高の愛の言葉に聞こえた――
そんなふうに言われたのは、初めてだった。
私を、必要としてくれる存在――、そんなものとは無縁だと思っていた。
ずっとひとりきりのままだと思っていた。
何かが自分の中で、大きく音を立てて弾けるような気がした。

――わたしはもう、ひとりじゃない――
初めてそんな風に思えた。
トーヤがそう言ったから、それもあるかもしれないけど、きっとそれだけじゃない。
トーヤと過ごしてきて、一緒に居て、私は自分は捨てたものじゃないかも
しれないと薄々感じていた。
トーヤと一緒に居ることで、私はひとりじゃないと思えていた。
もう、どれほど彼に感謝していいのかわからない。
私に必要なことばかり彼は教えてくれた。
それは、どんなに愛の言葉を囁かれるよりも、遥かに嬉しいことかもしれない。

寒かった冬は、あっという間に春の息吹へと変わった。
桜の花はまだ咲かない。けれど、じきに花びらが舞うようになるだろう。
もうすぐ、トーヤと会えなくなる・・・・

ずっとずっと傍にいたかった。
だけど、私達は一緒にはいられない。同じ道を、私達は歩くことができない。
私は野良猫、月のように美しく光ることはできない。
彼は王子様、闇に紛れた生き方は似合わない。
ふたいの間に、赤い糸なんてものはきっと無いだろう。
そんなものが無くても、私は彼を、愛している――

第２３話：～春～　君を忘れない（前書き）

桜の開花はもうすぐそこ。
レンの恋は、悲しいながらもどこか美しいのかもしれない。
クライマックス前夜祭を、どうぞお楽しみください。

第２３話：～春～　君を忘れない

「もう、サクラが咲くの？」トーヤは聞いた。
「つぼみができているから、もうすぐね。」
私達は、ひとつ前の春にふたりで来た、立派な桜の木が立つ民家を訪れていた。
私は前と同じように、塀の上に登っていた。
「前はサクラが咲くのがすごく楽しみだったけど、今は複雑。咲いてほしいようで、咲いてほしくないな・・・」
「きっと、次の月の出る夜には、桜が咲いているわ。」
「時間が、止まればいいのに。」トーヤはそう言った。
「私もそう思う。でも、それだけは無理だわ。誰にも、どうすることもできないものが唯一、時間なんだもの。」私は言った。
レン――、とトーヤは言う。
「僕は、君を忘れないよ。どんなに時が経っても、どんなに歳をとっても、絶対に。」
真っ直ぐなトーヤの目が、私を映す。
私だって――
「私も、トーヤを忘れないわ。絶対に。」
トーヤを忘れるはずなんかない。
こんなにも、深く、確かに愛した人を――

「ねぇ、トーヤ・・・」
ためらいがちに、私は口を開いた。
「私を、月へは連れていけない？」私は聞いた。
レン――、とトーヤはまた言った。
「僕だって、できることならそうしたい。でも、それだけは絶対にしてはいけないことなんだ。それが、月から地球へと移動できる僕らの、絶対の決まりなんだ・・・」

「そう・・・」
もう、どんな願いも私達の間では通用しないのだろう。
「いつも見守っているから。君が、幸せであるように・・・」
「私もよ。いつもあなたの幸せを祈るわ。あなたが、大切な人達と幸せであるように、世界中の誰よりも私が、あなたの幸せを祈るわ。」
私は言った。
私にできることはもう、それしかない。
「うん。」とトーヤは言った。

次に月が昇る夜、おそらく桜も咲くだろう。
それで、トーヤに会えるのは最後だろう・・・・
出逢ったばかりの頃は、別れの日が来るなんて思っていなかった。
ずっとずっと一緒にいられると思っていた。
だけど、始まりがあるものには必ず終わりがある。出逢った日があるなら、
いつの日が別れの日も来るのだろう。
それは、誰かが決めたものなどではなく、生きているという事は、そう
いうものなのではないだろうか。
そしてそんな出逢いと別れを繰り返して、誰もが大切な人を探すのだろう。
それはまるでジグソーパズルのように、ピッタリと合うたったひとつのピース
を、誰もが探しているのかもしれない。
どんなに悲しい愛に遭遇しようとも――
恋に痛みはつきものだから――
だけどきっと、どんな出逢いも、別れも、恋もきっとムダじゃない。
私がトーヤと出逢い、トーヤに恋をし、別れてしまうことも、ム

ダなんか
じゃない――

第２４話：～春～　告白（前書き）

いよいよトーヤとの別れの時、悲しいながらもすべてを受け入れたレン。
お待たせいたしました、最終話です。

第２４話：～春～　告白

夜桜を月が照らすと、一層美しさが増す。
月が出た。
桜が咲いた――

午前１２時の、いつもの空き地。
目の前に光が現れた。中から、真っ白のシャツに、黒のスーツを着て、綺麗な青色のネクタイをした青年が現れた。
「やぁ、レン。」
トーヤが来た。
「行きましょう。」私は言った。
あぁ――、とトーヤは言う。
私達は歩き出した。目指すものは桜の木。きっと、今夜も綺麗に咲き誇っていることだろう・・・

「美しい・・・・」トーヤは桜を眺めて言った。
「えぇ、本当に。」塀に登っていた私は言った。
「もう一度、見ることができて良かった。」
桜は綺麗だった。桜を見ているトーヤも綺麗だった。
しばらくするとトーヤが、行こうか――、と言ったので、私は塀から
降りて、トーヤと並んで歩きながら空き地へと戻った。

空き地に着いた頃にはもう、残された時間はあと半分ほどしか無かった。
もう本当に、あとわずか。
「トーヤ・・」私は重たい口を開いた。
「なんだい？」

「私、あなたが好きよ。」

やっと言えた。ずっと言いたくて言えなかった。

今言わなければ、もう二度と言えない。そんなのは嫌だった。

桜の花の美しさと、それを見るトーヤの微笑が、私に勇気を与えてくれた。

レン――、とトーヤは言った。

「私、ずっとあなたが好きだったの。好きで好きでたまらなかったの。

こんな気持ちになったのは初めて。きっと、あなたじゃなかったら、私は

知らないままだったわ。」

私は続けた。

「私、あなたを好きで幸せだった。」

本音だった。私は幸せだった。

――トーヤを好きで、幸せだった――

「もしかして、僕は知らない間に君を傷つけていたかな?」トーヤは言った。

「いいえ、そんなことはないわ。確かに悲しいこともあったけど、あなたが

悪いわけじゃないのよ。そういうものなだけなのよ。」私は言った。

「ありがとう。」

トーヤは笑って言った。最後に、トーヤの笑顔が見れて良かった。

「レン、君は生まれ変わったら何になりたい?」トーヤが聞いた。

そんなもの、決まっている。

「あなたと同じ”もの”になりたいわ。」

そうか――、とトーヤは言った。

「それならレン、君が生まれ変わったら、生まれ変わった僕と結

婚しよう。」
そんな言葉が聞けるとは、思ってもいなかった。
「私でいいの？」
「もちろん。ただ、それまでは君にひとつも愛の言葉が言えないんだ。それを
許してくれないか・・・」
「そんなものは、無くていいわ。あなたがそんなことを言ってくれるなんて、思って
もいなかった。嬉しいわ。」
「でも、生まれ変わった君に会えるかな？」トーヤは言った。
「きっと会えるわ。私があなたを探す。私はきっとまた、あなたに出逢えるように
生まれてくるだろうから。」
「それは良かった。」とトーヤは言った。

トーヤの体が光り始めた。
「もう、時間だ・・・」とトーヤが言う。
「これでもう、会えないのね・・・・」
もう、もがくことも足掻くこともできない。
「今まで、ありがとう。」トーヤは片手を差し出した。
「私のほうこそ、本当にありがとう。」私も片手を差し出した。
初めて出逢った頃はきちんとできなかった。今ならできる。心のこもった握手が。
トーヤの体は、もう半分くらい光に埋もれていた。
やがて、強く握り締めたふたりの手も離れていく。

「あなたが大好きよ・・・・」
そう言った私に、トーヤはただ微笑みだけを返してくれた。

――――さよなら――、とトーヤ。

――――さよなら――――、と私。

光がトーヤを包み、やがて、消えていった。

空き地に静寂が戻った。
私はそこを一歩も動かなかった。
瞬間、何かが頬を伝った。
雨が降ってきたのだろうか。でも、空は晴れている。

涙が流れた――
生まれて初めて、私は涙を流した。
涙は枯れることなく、尽きることもなく、ただひたすら私は泣いた。

トーヤ――、トーヤ――、トーヤ――・・・・・

心から愛していた。
叶わない恋だったけど、幸せだった。
本当に、幸せだった――

ありがとう、トーヤ、大好きよ・・・・・・
空高く光る月に向かって、私は言った。

私は、街を彷徨う真っ黒な野良猫。
私の名前はレン。
これからもずっと、私の名前は『レン』――・・・・

第２４話：～春～　告白（後書き）

長くこのお話を読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。

所々に未熟な点が見られると思いますが、多くの方に読んでいただければそれだけで幸いです。

今、恋をしている方、恋に悩んでいる方、恋に悲しみはつきものので、それがあるからこそ恋は楽しいのではないでしょうか。

そんな、恋の悩みを抱えている方々に、この小説を通してエールとなれば良いと思っています。

みなさん、頑張ってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7046a/

My Dear MOON

2010年12月14日22時23分発行